

## 令和2年第1回総合教育会議

## 「黒川の里山体験学習を中心にした川西市の体験学習における今後の取り組み」

教育委員 服部 保

## I 黒川を中心としたまちづくり方針(案)への提言

## 1 黒川地域の自然・文化資源の把握

## (1) 自然資源

- ① 台場クヌギ(14ヶ所) 大谷、大堂越えなど
- ② エドヒガン(6ヶ所) ケーブル付近、桜の森、一庫公園、妙見の森、一庫ダム、クリーンセンター
- ③ ブナ林(1ヶ所) 妙見山

## (2) 文化資源

- ① 炭焼き・・・今西氏
- ② 黒川小学校
- ③ 大谷鉦山、勝星鉦山
- ④ 間歩(鉦山の採鉦地)・・・国崎クリーンセンター、一庫公園
- ⑤ 徳林寺
- ⑥ ちまき(食文化)・・・ナラガシワとヨシで包む「ちまき」

## (3) 観光・レクリエーション資源

- ① 一庫ダム(ダム、里山景観、エドヒガン)
- ② 黒川ダリヤ園
- ③ 県立一庫公園(里山景観、エドヒガン、間歩)
- ④ 国崎クリーンセンター(エドヒガン、間歩)
- ⑤ 知明湖キャンプ場
- ⑥ 妙見山(660m)(ブナ林、エドヒガン)
- ⑦ 能勢電鉄ケーブル、リフト(里山景観、エドヒガン)
- ⑧ 台場クヌギ回廊
- ⑨ エドヒガン回廊
- ⑩ 文化財回廊

## 2 自然・文化資源の保全・広報

## (1) 天然記念物指定

- ・ 台場クヌギ、エドヒガン、ブナ林(21ヶ所のうち5ヶ所指定、指定の拡大)
- ・ 市指定より県指定、さらに国指定へ
- ・ 文化的景観地域の指定へ
- ・ 能勢町野間の大ケヤキ(国天然記念物)、能勢町妙見山ブナ林(府天然記念物)との連携

## (2) 無形民俗文化財指定

- ・ 今西さんの一庫炭(和歌山県の備長炭は指定されている)
- ・ 黒川の「ちまき」(ナラガシワとヨシで包むちまき)(宝塚市のちまきは2020年3月に指定)

## (3) 林業遺産・産業遺産の指定

- ・ 黒川奥瀧谷のクヌギ林は林業遺産として登録済み
- ・ 大谷鉦山、勝星鉦山

## 3 自然・文化資源の学習

## (1) 小学校4年生の里山体験学習の充実(3年生の環境体験学習、5年生の自然学校などとの体験学習の体系化、4年生の体験学習は兵庫県内で川西市のみ)

- ・ 貴重な自然である台場クヌギ、エドヒガン、ブナ林の学習、「ふるさと川西意識」の醸成
- ・ 日本一の里山だけではなく、近年課題となっている人と自然の共生、生物多様性、防災・減災、温暖化なども学ぶ
- ・ 市民団体の支援による4年生里山体験学習の推進(学校教育と社会教育の連携)

## (2) 里山センターの設置(黒川公民館)

- ① 日本一の里山を証明する資料室、図書室の整備(日本一を裏付ける文献類の受け入れ、服部が寄贈)
- ② 小学校4年生里山体験学習の学習の場としての里山センター

- ③ 里山ガイドの養成(レフネックを活用した4年生里山体験学習の指導者や市民・観光客への里山ガイドの育成)
- ④ 市民、観光客への各種資料提供
- ⑤ 黒川を中心施設
- ⑥ 黒川小学校の紹介

#### 4 黒川における交流・連携

- (1) 黒川の住民と里山保全市民団体との交流
- (2) 黒川と豊能町・能勢町との連携
- (3) 里山保全市民団体と小学校4年生の交流
- (4) 観光客、各種活動団体との交流

### II 地域財を生かした環境体験学習の充実

#### 1 地域財(地域の自然・文化資源)の把握

- (1) 地域資源の文化財指定
  - ① 水明台、清和台の天然記念物指定
  - ② 天然記念物指定による市民団体への応援

#### 2 地域財の学習(ふるさと川西教育)

- (1) 小学校3年生の環境体験学習
- (2) 市民団体の支援による3年生の環境体験学習の推進
- (3) 兵庫県一の環境体験学習の市民による支援体制
- (4) レフネック等を活用した地域資源についての市民の学習

### III 校内の自然環境の整備

#### 1 校内の樹木の大径木化

- ・ 樹木管理の困難さ(伐採時の危険性)
- ・ 児童がふれることのできない高木化(五感で感じるができない)
- ・ 台風、大雨による倒木の危険性

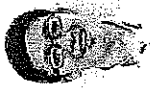
#### 2 校内の自然環境の活用

- ・ 新型コロナ下での身近な自然とのふれあい
- ・ 日常的にふれるきわめて身近な自然(もっとも身近な体験学習の場)
- ・ 学校内の有効な自然資源

#### 3 校内自然(樹木等)の実態調査と危険木除去の必要性

達成感や自己有用感を高める  
体験活動の工夫

～川西市の里山体験事業～



川西市立栗谷小学校  
教頭 野間 俊介

1 はじめに

本校は川西市の北部に位置し、開校は明治6年と、川西市内で最も歴史のある小学校である。それゆえ地域と密接に連携し、地域に支えられ発展してきた。かつては児童数1000人を超え、川西市内でも最大規模であった本校も、現在は670名程度と児童数が減少している。

校区のおよそ5分の4がベッドタウンであるが、ところどころに農村風景がみられる。新名神高速道路・川西インターチェンジの開通や川西市中央部の再開発などにともしない、校区の環境の変化が見られる。しかしながら、地域の伝統的な文化が色濃く残っている校区でもある。このような本校の校区に「日本の里山」と呼ばれる黒川地区がある。

黒川地区は、川西市の最北部に位置し、深い歴史がある。その黒川地区が「日本の里山」と呼ばれるには、いくつもの理由がある。古くはこの周辺の一帯・国崎等の北摂地区全体で炭焼きが行われていた。その歴史が黒川地区で現在まで続き、茶道で使用される道具炭として最級品である池田炭(一庫炭)が生産されている。この池田炭は、かつて豊臣秀吉や千利休も愛用したと言われている。

このような歴史・文化的な特徴をもつ黒川地区だが、その池田炭の生産のためには、材料としてクヌギが必要である。そこで黒川ではクヌギの枝を得るために、クヌギの幹を

1～2メートルのところで伐採し続けてきた。結果、幹が太くなり、新たな枝が形成され、台場と呼ばれる形状となった(台場クヌギ)。



▲台場クヌギを観察する児童たち

このことで効率よくクヌギの枝を得るとともに、シカによる新芽の被害を防ぐことができる。また、台から出た芽は生育が早く、台の高さの分、他の草木に比べ日照を得やすく生育しやすい。このような昔からの知恵が、今もなお引き継がれており、台場クヌギを中心とした、黒川ならではの景観が形作られている。

この景観という面においても、黒川地区では、年をずらしながら、約8年周期で台場クヌギの枝を伐採(輪伐)していることから、伐採年度の異なる樹林がパッチワーク状になっていく。このような黒川ならではのパッチワーク状の景観に加え、春にはエドヒガン(桜の一種)が開花することで四季折々の美しさを感ずることができる。この黒川の台場

クヌギの群落は川西市教育委員会より、市指定文化財(天然記念物)に指定されている。

また、台場クヌギには、オオクワガタやカブトムシ、オオムラサキなど様々な昆虫類が集まり、周辺の池には多くの水生生物が息を息し、周辺の池にも多くの種類のトンボが集まることから、多様な生物を観察することができる。

これらのことから、黒川地区は「日本の里山」と言われている。川西市ではこのような黒川地区の素晴らしさを活かして、黒川地区をフィールドに体験学習活動が行われている。

2. 川西市における里山林験学習事業について

兵庫県下全小学校において、3年生では環境体験学習、5年生では自然学校として、兵庫県体験教育が実施されている。川西市ではこれらに加えて市内全小学校4年生において、「里山林験学習事業」が独自に行われている。ここに1・2年生での生活科における栽培体験やプール等での水生生物観察、6年生での総合的な学習の時間や社会科・理科での学習などを加えることで、小学校6年間の「人・くらし・自然とのふれあいを通じた連続的な体験学習」の取組となっている。

里山林験学習事業は、先に述べた「日本の里山」といわれる川西市北部の黒川地区で舞台に行われる体験学習である。黒川地区での体験活動や地域住民との交流を通して、自然に対する敬意や生命のつながり、環境保護の大切さ等を実感するとともに川西の持つ豊かさ(ひと・くらし・歴史・自然等)にふれあうことを目的としている。黒川地区での体験活動の例として、里山でのフィールドワークや稲穂・水生生物の観察、下草刈り等が挙げられる。また、地域住民とのふれあいやとして、里山のくらしに関する講話や炭焼き窯の見学、しめ縄づくりの見学などが挙げられ、これらを組み合わせ、市内各校においてそれぞれ工夫した取組が行われている。

3. 本校の取組について  
～自分たちの校区を深く知ろう!～

(1) 事前学習

黒川地区の散策にあたって、事前学習として、里山とは何かについて学習した。里山とは人里近くにある生活と密接した空間である。つまり人間が自然と共生しながら活用している森林のことである。そこでは、クヌギやアカマツ、カシ、コナラ等の木で薪や炭が作られ、堆肥や草木灰を作るために落ち葉も集められた。ほかにも建材や食料を手に入れた。このように、里山は人家のまわりであって、生活になくなくてはならないものであった。このような里山が今でも黒川地区で引き継がれているという歴史性・炭焼きを通して見える文化性などを、子どもたちには知ってほしい。素晴らしい環境が自分たちの校区に身近に存在していることに驚いていた。

また、フィールドワークの際に、より自然に注目しながら興味をもって活動することをねらいとして、「自分たちが見つけてみたい動植物」を決めることにした。そのために、「かわにし 里山の自然と生きもの」(川西市教育委員会編)を活用した。この冊子では、黒川の様子や、そこに生息する多様な動植物、さらに地質などが写真付きで詳しく紹介されている。実際に黒川地区で見られるものの中から、自分が見つけたいものを選べるため、インターネットや図鑑を使って考えるよりも具体的であり、見つけられる可能性が高まった。また、調べやすいため、学校に戻ってきた子どもたちは「あのトンボの名前は?」と自分たちで調べていた。

(2) 6月の様子

黒川地区へは6月と11月、2回訪れた。6月は里山を感じることに、自分たちの校区を知ることをめあてて、能勢電鉄妙見駅駅から黒川公民館までの約3キロメートルの道りを徒歩で移動した。時間がかかるものの、

黒川地区の様子を肌で感じることは大きい。移動の際、事前学習で知ったパッチワーク状の景観を確かめたり、野草の名前を確認したりしながら、里山のくらしや自然にふれることができた。

現地に着くと、黒川地区の地域ボランティアである里山体験学習サポーターの方々より黒川の自然と人々との共生の歴史や自然、特異な四季の変化や、棚田における稲作、小学校時代のお話など、子どもたちは興味深く聞いていた。



▲ フィールドワークの様子

その後、クラスごとに里山体験学習サポーターの方と一緒に里山散策を行った。散策をしながら、棚田や里山に豊富にある森林資源を活用した菊炭<sup>※</sup>づくりやシイタケの栽培、その結果台状に生長した台場クヌギ、活動中に見つけた野生生物や里山の植物などについて話をしながら自然の豊かさや里山でのくらしについて理解を深めることができた。

また、「みんなに紹介したいものを撮影しよう」として、班に1台のデジタルカメラを用意し、事後のまとめ学習の資料を撮影した。撮影することで、自然物を持って帰ることができなく、すすんで自分たちで取り組み、また容易に活動を振り返ることが期待できた。特に子どもたちは台場クヌギや着ちていたトビの羽、ササユリ、サワガニ等に興味をもって観察したり、撮影したりしていた。



▲ 紹介したいものを撮影する様子

午後からは炭焼き窯見学をした。窯炭の作り方や窯の構造などについて詳しく教えていただいた。このような窯が校区にあること、炭作りの工夫などを知り、子どもたちは「今度、家族で来て、炭炭を分けてもらいたい」「東谷に、こんな歴史があったとは知らなかった」と喜んでいった。

フィールドワーク後は、取材してきた内容をもとに、伝えたい内容に合致する写真を選び、レイアウトを工夫しながら壁新聞を作成した。



▲ 壁新聞の一例

(3) 11月の様子

11月の活動は、社会科「ごみのゆくえ」とも関連して取り組んでいた子どもたちは、6月に感じて取っていた子どもたちは、ごみの処理や環境への影響などの学習に対して、真剣に取り組んでいた。そこで、クリンセンターを見学することで、北探のごみの処理や、環境負荷に対する取組について実地に学んだ後、あらためて黒川の里山に

触れることにした。クリンセンターでは、子どもたちが係員の説明を一生懸命に聞き取り、メモする姿が見られた。

黒川地区では、初夏の里山の様子、秋の里山の様子を比較することを目的に、場所を変えずにフィールドワークを行った。子どもたちは「なつかしいな」「ここがお気に入りな場所やねん」「前はここにカエルがいたね」「あ、ここにキノコが生えてる！」と面白いながら、愛着を持って散策していた。また里山体験学習サポーターの方々より、黒川での米の栽培や原木シイタケの栽培、実りの秋を迎えて里にまで下りてくる野生動物の動きなど、秋の様子について具体的な話を伺うことができた。



▲ 原木シイタケ栽培の見学

このフィールドワークを通して、子どもたちは初夏のころ、菁々としていた山々が色づいてきたこと、見られる動植物が変わっていったこと等をとらえることができた。また、このような素晴らしい自然環境を保全していくためにごみの処理について深く考えていく必要があることを感じ取ることができた。

また、そのあと行われた作品展にも里山の学びを関連させることにした。それがダリアの花である。川西市は、山形県川西町とのダリアを通して交流が行われていることから、黒川地区で「黒川ダリア園」を中心にダリアが栽培されている。このことから、「黒川地区の花」ともいえるダリアを作品展で再現することにした。子どもたちも、「黒川の花や！」と言いながら作っていた。



▲ スイレン咲きのダリアの作品

4. 成果と課題 ～おわりに～

春と秋の里山を比較しながら散策することができた。同じ場所を訪れることで、季節による里山の変化をより一層とらえることができた。「春にはサワガニが多くなった」「秋にはトンボが多くなった」「紅葉が始まってきてきれいだっただので、秋の里山が好き」「どろぐりをたくさん拾えたのがうれしかった」等の感想が見られた。

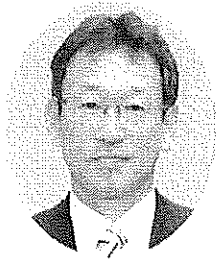
里山の歴史やくらし、炭焼きについて学んだことを通して、自分たちの校区には素晴らしい自然環境や深い歴史があることを知ることができたことには有意義であった。自分たちがふもとの北探東谷に愛着を持ち、川西市に対して興味を深めたように感じられる。また、黒川地区の豊かな自然環境を体験したことで、子どもたちの環境保全に対する意識が高まった。北探地域におけるごみの処理、環境保全や資源（再利用等）の環境負荷を考えたい取組に関する学習に意欲をもって取り組んでいく。今後は子どもたちが今ある豊かな自然環境を10年後20年後も守り、この地域を誇りに思えるように育んでいきたい。



※ 黒川地区の里山に由来する本紙の「ごみのゆくえ」は、黒川地区の環境教育として活用されています。



# 地教委めぐり



## 地域と人の輪でつくる 育ち学び合う教育の推進

川西市教育委員会  
教育長 石田 剛

### 1 はじめに

川西市は兵庫県の南東部に位置し、東西に狭く、南北に細長い、ちょうど「タツノオトシゴ」のような地形で、人口は令和2(2020)年現在154,000人余りとなっています。

本市教育委員会は「地域と人の輪でつくる育ち学び合う教育の推進」を基本理念とし、「地域に根ざした子育て・教育を推進します」「未来を切り拓き、たくましく生き抜く力を育みます」「互いを認め合い、共に生きる態度を育みます」「参画と協働を支える生涯学習を推進します」「安全で安心できる快適な教育環境を整備します」を五つの基本方針として、取り組みを進めています。

### 2 重点的な取組

#### (1) 幼児教育・保育と学校教育

川西市教育委員会は平成28(2015)年度から教育委員会事務局内に学校教育・社会教育を所管する「教育推進部」と子育て支援・幼児教育・若者支援を所管する「こども未来部」を設置しています。これは、国の施策として幼児教育・保育における幼稚園と保育所を一体化する、こども園設立の動きに対応し、川西市においても公立でのこども園設立に対応するための組織改編でありました。この組織改編を契機に川西市の幼児教育・保育施設の整備が加速し、

現在では公立幼稚園と公立保育所を統合した公立こども園を三園整備し、さらに二年後にも一園開園する予定となっています。

このような直接的な要因はあるものの、それによらず、川西市教育委員会として、委員会内に保育や若者支援等の、いわゆる学校以外の「こども」対象の所管のあることが最大限の利点となるよう、その連携や協働が深まる取り組みを進めています。

「教職員研修」を例に挙げると、小・中学校間の連携はもとより、幼稚園・こども園・保育所の教職員も参加できる体制を整え、それぞれの発達段階に応じた支援方法とともに、異校種・異業種から見たそれぞれの特色について交流する場を設定しています。

例えば、年度末に開催される「教育実践発表会」では、幼児教育・学校教育の教職員がそれぞれ自校園の実践を発表し、グループワークなどを利用して意見交流を行っています。



令和元年度 教育実践発表大会のようす

また、市指定研究会では、市内1小学校とそれに隣接する公立こども園が協働して、接続期に焦点を当てた研究に取り組んでいます。

このような実践を通して、自分たちの教

育観・保育観を改めて見つめ直す契機とし、系統的なこども支援を進めるための柔軟な運営体制の在り方などを検討する力を養っています。このような連携や協働は、不登校などの「生徒指導」や発達支援につながる「特別支援教育」、虐待なども関連する「家庭支援」などにも共通しており、幼児教育・保育から学校教育、青少年育成までを見通した長期的な視点の施策運営に不可欠なものだと考えています。

## (2) 市の特色を生かした体験教育

川西市の北部にある黒川地区は、本市教育委員の服部保教授が「日本一の里山」と名付けた、自然と人間の営みが融合する希少な地域です。

「里山」とは、「人が自然に働きかけて生まれた樹林」のことで、人々が薪、炭、柴などの燃料を得るために作られた樹林のことを指しています。例えば、黒川地区では、「菊炭」として有名な炭づくりとその原料となる台場クヌギを維持するために人間と自然が共生していました。そのような中で生まれたのが「里山」です。

川西市では全小学校で4年生時に黒川地区を訪れ、里山の自然とそこで生活する人々の暮らしを学ぶ「里山体験学習」を実施しています。



4年生 里山体験学習のようす

「里山体験学習」では、ボランティア団体「川西里山クラブ」などの方々のご協力を得ながら、炭焼き窯を見学したり妙見の森を散策して木工クラフト体験をしたりするなど、児童にとっては実際に川西の自然に触れる貴重な体験の場となっています。

また、小学校3年生での「環境体験学習」についても、小学校区内での自然体験に重点を置いた活動を進めています。

大阪や神戸などのベッドタウンとして開発され発展してきた川西市では、住宅地として開発されたすぐ近くに今も多くの自然が残されています。近年はそれらの自然を「まちやま」として守ろうと、ボランティアやNPO法人などの有志の方々が精力的に保全活動に努めておられます。

例えば、水明台地区では「溪のサクラを守る会」の方々が十年以上保全活動に取り組んでこられました。その活動の一環として地域の小学校3年生を対象に、桜の希少種である「エドヒガン」の育樹活動を実施しておられます。児童たちが自分たちの住む地域の自然の素晴らしさを知り、それを守るための活動に参加することで、「ふるさと」としての意識を醸成することにつながっています。

また保全活動に従事されている方々にとっても、地域の児童やその保護者に活動の意義等を伝えることが貴重なモチベーションになっており、「スクール・コミュニティ」という、学校教育と社会教育の協働の場としても価値のある活動となっています。

今後は市内各小学校区にそうした「環境体験学習」の場を整備していき、川西市としての特色を生かした体験学習として確立させていきたいと考えています。